**「身分の低い主のはしために目をとめてくだった」**

**聖母の被昇天・C年（16.8.15）**

**聖母被昇天の伝統**

本日、全世界のカトリック教会は、聖母マリアの被昇天、つまり、マリアが、体も魂も一緒に天の栄光にられたことを、まさに教会の完成された姿として盛大にお祝いいたします。

　実はこの聖母の被昇天の出来事は、すでに初代教会の時代から、と語り継がれてきた伝統があります。特に、5世紀そして6世紀には、次のような伝説が宣べ伝えられるようになりました。

　実は、イエスの十字架上での死後、弟子のヨハネのもとに身を寄せていた（ヨハネ19.27参照）聖母マリアが、丁度60歳になられたときに、また天使が現れたそうです。しかも、その天使が、マリアが亡くなられるとき、納められるの前に飾られるの枝を、なんとすでに楽園の御子キリストのもとへ運んでしまったと言うのであります。実は、この棕櫚の枝ですが、彼女の死後三日間、の前に飾られることになっていたそうです。とにかく、世界中からいとも不思議な力によって集められたキリストの弟子たち（使徒たちが中心）に見守られながら、聖母は確かに息を引き取られました。ところが、丁度その時です。なんとイエスご自身が大勢の天使、聖人たちを従え天から降りて来られ、聖母の魂を受け止めて、天使たちと聖人たちの大合唱のうちに再び天に昇られたというのであります。ですから、「聖書と典礼」の表紙のタイトル「神の母の眠り」という言い方もされるようになったのであります。　とにかく、このイエスによって天にげられた聖母は、実は、魂だけでなくなんとお体も一緒にげられたのだ、という信仰が特に民衆の間に広まり、ゆるぎない伝統を定着させて来たというのであります。

　そして、この尊い伝統は、とうとう1950年11月1日に260代目の教皇ピオ12世は、次のように厳かに宣言なさいました。

**「われわれの主イエス・キリストの権威と、使徒聖ペトロと聖パウロの権威、およびわたしの権威によって、無原罪の神の母、終生処女であるマリアが、その地上での生活を終えた、体と魂と共に天の栄光にげられたことを、神によって啓示された真理であると宣言し、公に広め、決定する。」**

ですから、この祭日がまさに民衆の間に広がっていた信仰の伝統が、教皇によって信ずべき真理であると宣言されたその流れに注目すべきではないでしょうか。つまり、上からではなく、まさに下からの力強い信仰が認められたというにほかなりません。

**身分の低い者を高く上げ**

次に、今日の福音をもう一度振り返って見ましょう。

　実に、今日の朗読箇所は、マリアが親戚エリサべトを訪問した場面を感動的に伝えております。ちなみに、ルカ福音の文脈ですと、マリアに天使ガブリエルが、イエスを身ごもるというお告げをもたらし、おことば通り信じて受け入れた直後の出来事になっております。その場面を、ルカは次のように簡潔に語っております。

　**「わたしは主のはしためです。あなたのお言葉どおり、このわたしに成ります様に。」**ここで、言われている**「主のはしため」**という言葉ですが、恐らく詩編123編を念頭においた表現と考えられます。つまり、詩編では、次のように歌われております。

　**「ご覧ください、僕が主人の手に目を注ぎ**

**はしためが女主人の手に目を注ぐように**

**わたしたちは、神に、わたしたちの主に目を注ぎ**

**憐れみを待ちます。」（詩編123.2-4）**

ですから、乙女マリアが誰か女主人に仕えていた、はしためであったというのではなく、あくまでも神の憐れみを待ち望む心の姿勢を表していると言えましょう。次いで、天使ガブリエルのお告げの通り、まさに聖霊によって身ごもったマリアは、同じく六か月前に洗礼者ヨハネを身ごもった親戚エリザベトと自分たちの素晴らしい恵みを分かち合うために、**「出かけて、急いで山里に向かい、ユダの町に行った。」**のであります。そして、ザカリア（エリザベトの夫で、しかも神殿で仕えていた祭司）の家に入り、早速、エリザベトに挨拶をしました。ところが、エリザベトがマリアの挨拶を聞いたとたん、なんと胎内の子（洗礼者ヨハネ）が、と言うのです。そこで、エリザベトは聖霊に満たされて、マリアを褒めたたえます。**「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。・・・あなたの挨拶をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました。主のおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょう。」**まさに、最高のほめ言葉にほかなりません。特に、マリアの幸せの源泉は、主の語られたことは、必ず実現すると信じていることにほかなりません。

　そこで、マリアは、聖霊に満たされて、神を賛美します。

　このマリアの賛歌は、ラテン語で歌われていたときの伝統に従い、ラテン語の出だしの言葉、**Magnificat**で始まるのですが、特にヨーロッパの中世以来、「マグニフィカト」というタイトルの賛美歌が数多く作曲され歌われ続けて来ました。ちなみに、『教会の祈り』では、毎日、晩の祈りでこの賛歌を歌います。ところで、この賛歌ですが、イスラエルの祈りの伝統に基づいているのではないでしょうか。例えば、旧約聖書にあるサムエル記上に、この賛歌の原型とも受け止めることが出来る、サムエルの母ハンナの賛歌が紹介されております。ですから、マリアは、イスラエルに伝わる伝統的な賛歌を土台にし、マリア自身の祈りを加えたのではないでしょうか。

　とにかく、このマリアの賛歌は、二つの段落（47-50節と51-56節）に分けられております。つまり、最初の段落で、マリア個人が、いただいた特別な恵みを振り返ります。特に、ご自分が誰であるかを、**「身分の低い、この主のはしために」**と、お告げ場面での信仰告白の出だしの言葉を繰り返します。

　ですから、後半の段落で、**「権力あるものをその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます。」**と、歌います。

ところで、1531年の12月の初め**、**つまり、メキシコがスペインの軍隊に降伏してからすでに10年が経っていたときのことです。メキシコシティの郊外にあるグアダルーペで、インディオの女性の姿で聖母マリアが、インディオのホアン・ディエーゴに出現なさり、次のように宣言なさったのであります。

　**「わたしは終生汚れなき聖マリアです。人を造り、この国とすべての天と地を造られ、すべてを生かしておられるの神の母です。・・・この場所で人々にイエスを示し、告げ知らせるのです。彼の愛と、慈しみの眼差しと、助け、救いの手を。なぜなら、わたしは、誠に、あなたがたの慈しみ深い母、あなたやこの地に住むすべての人々の母、わたしを愛し、呼び求め、探し求め、わたしに信頼を置く多くの人々の母。わたしはその場所で、皆の嘆きや悲しみを聞き届け、痛みや辛さ、惨めさをいやしてあげましょう。・・・」**

とにかく、被昇天の聖母の取り次ぎを、切に願いましょう。